

歴史の 活力の

永通
樂
宮城谷昌光

文春文庫

歴史の活力

宮城谷昌光

み 19 6

文春文庫



9784167259075



1910195004501

ISBN4-16-725907-9

C0195 P450E

定価450円(本体437円)

日本を代表する企業の創業者たちの言行をつぶさにみると、それらが中国の歴史や古典にあることとみごとに一致する。それにしても、次代の先覚者たちが、これほどまで同様の苦難を体験しようとは。歴史はまさに人生の教科書である。人間の真価が問われる今日、中国歴史小説の第一人者が「人はいかにあるべきか」を記す

み 19 6



文春文庫

時間と、人に対する命名

名前がもつ不思議な力

中国人は、本名とあぎなの二通りをもっていた。たとえば、孔子の本名は「丘^{きゆう}」であり、あぎなは「仲尼^{ちゆうに}」である。

なぜ、そんな必要があるのかというと、本名は、ふつう家族で呼びあうもので、他人に知らせることはない。

ひとりの人間にとって、家族は絶対の小宇宙であり、世間は、べつの宇宙である。だから、たとえば身内から犯罪者が出て、家族はかばい通す。なぜなら、犯罪はべつの宇宙でおこなわれたのだから、その法は、家族のなかでは適用されないからである。

べつの宇宙、つまり外の社会で生きてゆくときの名が、あぎなである。

それはともかく、親は子どもに幸福をねがって、名をつける。だが、子どもが成人となって、自分の名が気に入らず、改名する例はすくなくない。

名をかえたといえは、中国にこんな逸話がある。

明の哲学者である王陽明は、かれが生まれるとき、祖母のみた五色の雲にちなんで、「雲」と名づけられた。ところが、雲は五歳になっても、口がきけなかった。ある日、雲が外で遊んでいると、ひとりの僧が通りかかり、雲の頭をなでながら、「よい子だが、名がよくない」

と、いって、立ち去った。祖父はそれをきいて悟り、雲の名をやめて、守仁と改めた。王守仁は、たちまち口がきけるようになったという。

ただし、「陽明」は、かれのあぎなではない。あぎなは「伯安」である。陽明は号である。

筆者は、かつて小説の題名をつけるのなら、「ん」のつくものがよいと教えられたことがある。そういわれれば、夏目漱石の小説は『坊っちゃん』『三四郎』『門』『明暗』など、「ん」のつくものが多い。「ん」は、「運」に通じるからだろう。

時間に対する命名と元号

中国人が時間に名をつけるということを思いついたのは、かなり早い時代である。中国における最古の王朝である夏に、すでに暦があった。その暦はよくできたものであったらしく、二月の立春あたりを歳首とした太陰暦の原型である。

孔子のもとには夏暦についての文献があったのだろう。あるとき弟子の顔淵がんえんから、国を治めるにはどうしたらよろしいのでしょうか、とたずねられたとき、

「夏の時を行え」(『論語』)

といている。つまり時(暦)は夏王朝のものをもっともよいと孔子はおしえた。

ちなみに、夏王朝のころに年の単位は、「載」とよばれた。さらにいえばこの載という名称は、「千載一遇」(千年に一度出会う)という熟語のなかに生きのこって、いまにいたっている。

夏のつぎの王朝である商(殷)では、年のことを「祀」といい、月のことはやはり「月」といい、十日間のことを「旬」といった。

旬はさらに細分されて日となり、第一日を「甲」とよび、つづいて「乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」とよんだ。癸の日になると、宮廷で占いをつかさどる者

はかならず、

「つぎの旬に、わざわいがございませんでしようか」

と、神靈にうかがいを立てた。

この商王朝のときに文字が生まれたので、かれらが占いにつかった文字は、亀の甲や獸の骨に刻まれて残った。甲骨文字とよばれるものがそれである。かれらが時間を誠に清めることを考えだしたといってもよいであろう。またいうまでもなく旬は、いまでも上旬・中旬・下旬のようにつかわれている。

年の字はすでに商の時代にあったが、この字の意味は、「穀物が実る」ということである。

周王朝のはじめのころには、あいかわらず一年の単位として祀をつかっていたが、やがて年というようになった。その呼称が定着したわけである。

商のときの歳首は、いまの一月(旧暦の十二月)にあったところを、周では十二月(旧暦の十一月)にうつした。また一か月を三分するのをやめ、四分して、いまの一週間に近い考え方をしたのも、周の人々が最初である。

周のつぎに出現した苛烈な王朝は秦である。始皇帝は自らを「朕」といい、ほかの何人にもそのことばを使うことをゆるさなかった。周以前の時代では、庶民でも自分のことを朕といえたのである。

始皇帝は歳首を一か月早めて十二月(旧暦の十月)にした。が、この王朝は短命であった。始皇帝が崩御すると、南方の呉(会稽)から起った項羽によって、秦帝国は滅亡させられた。

ところが、項羽も沛(江蘇省)から起った一人の農民によって伏たれることになる。その農民というのが漢王朝の開祖となる劉邦である。

劉邦は秦の曆に手をつけなかった。第五代の皇帝である劉恒(文帝)は、漢王朝累代の皇帝のなかでもっともすぐれ、かれの治世は「国内は榮え富んで、礼儀が大いに興った」(『史記』)といわれるが、紊れた曆の大改正は断行できなかった。

そして、劉徹(武帝)の登場となる。

かれは文帝の孫であり、第七代の皇帝として即位した翌年が、西暦でいうと紀元前一一四〇年にあたる。

かれはみずからの治世を六年ずつに区切ることにした。なぜ六という数字をつかったかという点、これは「五行」の考え方にのっとったからである。

秦より前の時代に鄒衍という思想家が、宇宙を構成する元素を「土」「木」「金」「火」「水」と五つにきだめ、それらは循環するものであるから、各王朝はその循環にしたがつて興亡するのだと説明した。それが五行説である。

秦は「水」の徳をもった王朝であると考えられていたから、秦をほろぼした漢は、当

然「土」の徳をもっていなければならぬのに、漢王朝の初期には「われわれは秦の水徳をうけつぐものである」と考える者が多かった。「水」に所属する数は六である、というのが五行から敷衍した分類であった。

武帝は便宜上はじめての六年間を一元、つぎの六年間を二元とよばせた。そのうちに有司から異見の声があがり、

「元号は、天のしめす瑞祥ずいしやうにちなんで命名すべきであり、一、二、などと数えてはなりません」

というのがその内容であった。武帝はなるほどと思い、すでにすぎきった一元に「建元」、二元に「元光」と追称することをゆるした。中国における元号はここからはじまったのである。

やがて武帝は、漢王朝が土徳によるものであることを認め、歳首を夏曆とおなじ二月（旧曆の一月）にうつした。太陰曆が定着するのはそれからである。また土徳に属する数は五であるから、改元を五年ごとにおこなうことにした。

しかし、武帝が後元二年に崩御すると、後元という元号は四年までつづかず、つぎの年は始元と改元されてしまった。時間を修祓しゅうふつするために改元したことはあきららかであり、なおかつ、この始元年間はふたたび六年となり、のち皇帝がかわるたびに一元の年数もかわったため、改元の法則は五行の思想から離脱した。

日本におけるはじめての元号は、いうまでもなく、「大化」である。

元号の由来とその含意

天皇の死を崩御ほうごというのは、『礼記』によるものだろう。『礼記』は孔子の学団による礼儀の記録書ともいうべきもので、そのなかに、

天子の死するを崩ほうといひ

諸侯に葬むすぶといひ

大夫に卒しゆうといひ

士に不祿ふろくといひ

庶人に死しといひ

とある。大夫とは春秋・戦国時代の上級貴族のことで、士とは下級貴族のことである。しかし儒教の影響からまぬかれています史書の『竹書紀年』では、帝王の死に陟しやうの字をあてている。陟とは天に昇るという意味である。

さて『礼記』をふくめて、『詩経』『書経（尚書）』『易経』『春秋』をまとめて五経と

よぶが、日本の元号はそのなかの字句からとられることが多い。

明治と大正の元号は、いずれも典拠は『易経』である。

「聖人南面して天下を聴き、明にむかいて治むる。」

ここから明治とつけられたのだが、南面して天下に聴く者とは、天子のことにほかならないわけだから、時代をよくあらわしている元号といえる。

『易経』は占いの書であるので、謎めいたことばにみちていて、五経のなかでもっともわかりにくい。ただしおなじ『易経』のなかに、聖人について、「進退存亡を知って、その正しい対処を失わないものは、それこそ聖人であろうか」という意味の文があり、日露戦争などを思いあわせると、やはり明治の人は進退存亡をよく知っていたのかもれない。

つぎの大正の元号については、ふしぎにおもわれることがある。

「大いに亨るに正を以てす、天の道なり」

やはり『易経』にある文である。

正とは正道を意味する。これはよいのだが、そのあとにつづく文が問題で、「八月に至りて凶あり」とある。これはいかにも時代のさきゆきに不安をおもわせる。

そのせいか大正の元号の典拠として、もうひとつ『春秋公羊伝』がもちだされている。これがまたよくない。ちなみにその文とは、「君子は大いに正に居る。宋の禍いは、宣

公（い）を為すなり」というもので、宋という国で後継者をきめるにおいて宣公という国主が選抜をあやまったことを批判する文である。

さてそこで、大正の字をふくむ文につづいて「凶」や「禍」の字があるのはどうしたことか。また大正年間の八月に凶変はあったのだろうか。

大正三年の八月に日本は第一次世界大戦に参加しているが、これは凶変とはいえない。大正七年の八月に勃発した米騒動は凶の事象に属するかもしれない。ほかの年の八月にはこれといった異変はない。大正天皇の崩御は十二月であるから、論外である。首をひねった筆者が、まさか……と思いたったものが、「関東大震災」である。

これは大正十二年の九月一日のことであり、八月中のことではない。日本の暦は明治五年に太陽暦にきりかえられたが、旧暦ならその大地震は八月中におこったことになる。そうすると、大正という元号はいみじくもこの大災害を予言したことになる。ここが

『易経』という書物の恐ろしさとすばらしさであるが、元号選定にあたった人たちが悪いというより、むしろ逆である。かれらは古代中国で占いをつかさどった官人のように、天意をきいたことになり、人々に大災害のあることを警告する役目を、無意識ではあったろうが、担ったのだとさえおもわれてくる。

昭和の元号は『書経（尚書）』のなかにある「堯典」の、「百姓昭明なり。万邦を協和せしむ」

という文からとられた。ただしこの元号はすんなり決まったわけではない。典拠が「堯典」であるところにひっかかりを感じた人がいた。

どういふことかという点、堯とは中国の伝説上の聖王である。それはよいが、堯は王位を臣下の舜しゆんにゆずったではないか。したがって、今上陛下がそうなっていたらいい。こまる、というのである。

かわりにだされた案は「上治」であった。しかし、結局この上治案はしりぞけられ、昭和が元号として採択されたわけである。

昭和の時代についての感懐はさておき、これだけはいっておきたい。堯はたぐいぬ聖王であるがゆえに、あごを動かすだけで命令がゆきわたり、手をこまねいているだけで、事が成就したとさえいわれている。が、中国の史書や古典をよく読むと、堯の眞の像は臣下の横暴と外敵の驅逐にずいぶん苦慮した王であるということである。

さて、平成の元号から何を予見できるだろうか。

「地平らぎ天成り、六府三事、允まことに治まる。(地の大洪水がたいらぎ、天の五行も完成して、六府と三事がほんとうによくとのつた)」

これが『書経(尚書)』の「大禹謨」にある文で、六府というのは、さきに書いた五行の元素(土・木・金・火・水)に「穀」をくわえたものである。三事というのは、人として当然やらなくてはならぬ三つのこと(正徳・利用・厚生)をいう。六府三事をあわせて九功というのである。

さらに、平成の元号については、『史記』の「五帝本紀」から舜の業績をほめた部分である「父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝、内平らかに外成る」の文が引かれている。内平外成とは、家のながが平和になり、世の中もよくおさまったという意味である。

両書ともに、元号がとられた文節の前後に不吉な語句はない。ただひとつの懸念があるとすれば、舜も禹も水に苦しめられた王であるということだけである。

人名にもちいてはならない五つの名字

人や物に名をつけることは、つきつめて考えてみると、奇妙なことにおもわれてくるときがある。ふつうの名詞や動詞が、あるとき突然に、おおむね人や物の誕生とともに、固有のものとなる。そのふしぎさはほかにたとえようがない。

のちに日本鋼管会長になる河田重ひばりが生まれたとき、かれの父親は息子にどんな名前をつけたらよいか、町の有力者に相談にいった。するとこういわれた。

「昔から重盛とか、重という字は縁起がよい。であるから、重の字を上につけ、下にあなただの好きな字をつければよろしい。」

しかし父親は、下につける字を考えるのもめんどうにおもい、重の一字だけを名として届けでた。おかげで少年時代の河田重は女の子の名とよく感じがいされたらしい。たしかに平重盛は平清盛の長男であるから、なに不自由なく暮せたであろうが、かれがかくべつ幸運児であったとはおもわれぬ。それでも町の有力者は、重の字に何か感じるものがあつたのだろう。

重の字で想いだしたが、明治二十六年に津村順天堂を興した津村重舎の命名のいきさつがかわつてゐる。かれははじめ山田重吉という姓名であつた。ところがかれはこの名前がすこぶるきらいであつた。平凡すぎるということである。

——非凡な人間は、非凡な名をもたねばならぬ。

そう考へていたかれは、改名の機会をねらつてゐた。昔も今も改名にはめんどうな手続きがある。名をかえたいといつても役所はなかなかゆるしてくれない。が、かれは巧妙なことを考へつゐた。

ある日、山田という姓の家で男の子が生まれたことを知り、さつそく訪ねて「子どもの名前はきまつたのか」ときいた。まだきまつていないといふたえに、内心大いに悦び、「では、重吉にしなさい」といつた。ためらう相手を強く押し、その名を役所に届けさせてしまった。

そうしておいて、ふらりと役所をおとすれ、この村に同姓同名の者がいるので、わたしの方は重吉と改名したいと申しでて、まんまと成功したといふのである。

人名でも社名でも、あらたに命名するとなれば、やはりそれなりの注意をはらうべきであろう。

漢字をもちいるのなら、字づらよりも字の正しい原義をふまえて名づけたいものだ。漢字とは外国の文字であつたことをついつい忘れがちになる。たとえば三井や三菱などは、三という数字を社名にもつてゐる。

「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」(『老子』)

といつて、三は無量大をあらわす数字なのである。『淮南子』にも、「物は三を以て成る」とあるから、この数字はさうとう吉い。

奇数が陽、偶数が陰なので、事業にのりだす者がえらばねばならぬ数字は当然奇数である。

あるいは、東西南北のどれかを社名にいれる場合は、社主がもつてゐる徳を五行にあてはめてみたり、職種とのかねあいもあるうが、ふつう実りと収穫をあらわす西がよい。中国では周の武王も秦の始皇帝も漢の高祖(劉邦)も、すべて西方にいて天下をとることになった。

人名についていえば、名としてもちいてならないものが『春秋左氏伝』に列挙されてゐる。それらは、

国名

山川名

病名

六畜名(牛・馬・羊・鶏・犬・豚)

器物・玉帛名

である。山でとれる寶石を玉といって、海でとれる珠とは正確にはちがう。帛とは白のねり絹のことである。それらは病名をのぞいてすべて祭祀に関係があったからである。日本人は「美」の字をむやみに女の子の名につけたがるが、この字は「羊」と「大」が組み合わさってできたものである。大きい羊とは、神へのいけにえにふさわしく、たしかに清らかな羊であるにはちがいないが、やはり六畜名に入るとおもったほうがよい。注意を喚起しておきたい。